

新里明士

透過性の高い白磁に無数の穴をあけ、穴に透明の釉薬を埋める」とで作られる「光器」を中心に、特徴的な器で知られる新里明士。伝統的な工芸品のフィールドと現代美術のフィールドの両方で活躍している彼は、何を意識して制作を続いているのだろうか。



「光碗」2022年 磁器 径12.0×高さ9.5cm

——早稲田大学第一文学部を3年で中退して、すぐに多治見市陶磁器意匠研究所（以下意匠研）に入ったのですよね。

大学にはなんとなく入ったのですが、美術研究会というサークルで焼き物を作るうちにこれを続けようと思つたので、サークルを引退してすぐ大学を中退し、意匠研に入りました。意匠研に決めたのは、当時よく読んでいた「Glass and Art」でもよく特集されていた中島晴美先生がいたこともきっかけの一つです。

——1990年代末、ちょうど工芸と現代美術の越境がさかんに試行されだした頃かと思います。新里さんもそのことを意識したのでしょうか。

あまりそういう動きへの志向はありませんでした。中国のテクニカルな焼き物が好きだったので、伝統的な青瓷を作っていました。

——当時は、いわゆるファインアートには触れていたのでしょうか。ファインアートも好きでしたが、焼き物という固有の歴史があるメデイアを使いながら、西洋の美術史に組み込まれるというのは面白くないなと思つていました。上の世代は、現代美術に合わせるために工芸を変えようとしてうまくいっていないケースもあつたと思うので、自分は違う目線で焼き物の可能性を信じたいと思つたんです。

——新里さん以降の世代で、現代美術の領域で評価される作家は多いですが、どのような特徴があると思いますか。

桑田卓郎くんが評価されてから、

でしたか。

「薄い」とか「見込みが狭い」とか……とにかく使いにくい器だと言わされましたね。皇帝に献上するため、食器というより造形物として成立了た焼き物に惹かれていたので、そのイメージに引っ張られ、実用性を考えないで作る傾向がありました。

器として使いやすくするか、作品として成り立たせるかの岐路に立つたときに、穴を開け始めたんです。そうすると造形的なイメージが強くなって、自分の中でも区切りがつきました。それ以来、ぎりぎり使えるけれど使うことを第一の目的としていない器を志向するようになります。

——特に海外の現代美術展では、巨大な立体作品が出品されることもよくあります。その点、工芸作品でインパクトを出すのは難しそうです。

今となつては、大きいものこそ良いという価値観も薄れていますが、僕の作品の場合、技術的な制限があるので、空間をどのように使うかは常に意識して制作しています。そのため、なるべくホワイトキューブ以外の場所でも展示するようにして、空間の設定に取り組むよう心がけています。昨年の「ECHO あしたの畠谷寺での展示がその一環と言えます。

僕の作品、ひいては工芸というものの強みは、広い空間を使ってもディテールが成り立つことなので、そのディテールが占有する空間をどこまで広げられるかが重要です。兵庫

ずいぶん流れが変わったかと思います。彼が「工芸未来派」展（2012年、金沢21世紀美術館）に出品した頃、僕はちょうどアメリカにいたのですが、何か地殻変動が起きているといふのは耳にしていました。それ以前と以後で、桑田くんの作品の評価はかなり変わったと思います。彼のやっていること 자체は本質的に変わつてないのに。現代美術に過剰に適応しようとするのではなく、工芸の特色をそのまま強みとして出せたのではないかと思います。

陶芸美術館の「No Man's Land—陶芸の未来、未だ見ぬ地平の先」（2021年）では、高さが7、8mあり、外光が入るため他に希望する作家のいなかつたエントランスの空間をあえて希望しました。追加で中庭でも展示できるようになったので、建物の中と苔の生えた土の上の違いなど、様々な関係性に着目した展示ができたと思います。

—近年は、器をあえて破った作品が目立ちます。

器を破り始める前の20年間は、「光器」の技術を磨き続ける期間で

した。だんだん器用になつてできるようになつたのも良かつたです。器と、象徴としての器が自分の中で曖昧になつたので、一区切りつけた通さずモノとして純粋に見ててくれるのと、いつつて破り始めたんです。「光器」をはじめ僕の作品は器に極度の緊張を強いるので、その緊張に綻びを作ることで覆いかぶさつていた力が一気に発露するのが面白いです。

そのためには、ただ破るのではなく、100%の完品に近づけてから最後に破る必要があります。

ちょうどそれを始めた折に、現代美術のギャラリーであるYutaka

Kikutake Galleryに誘われて展示するようになったのも良かつたです。現代美術の鑑賞者は、工芸の知識をもつた方々が、工芸の中でも、器として作られた器を出品していましたね。

—一方で、柿傳ギャラリーでの個展では、様々な技法を使いつつ実用品として作られた器を出品していましたね。

現代美術も面白いですが、自分のルーツを忘れるのは本意ではありません。展示によって現代美術としての焼き物とクラシックな焼き物、どちらかに極端に振るように意識しています。

—茶碗を制作されることが多いですが、茶道の伝統を意識することはありますか。

茶事自体は面白いと思いますし、自分たちで企画することもあるのですが、制作においては意図的に距離

を置いています。茶道の決まりによつて茶碗の形式が規定されてしまつのがあまり好きではないので。茶碗を作つていても、良いバランスで自分の表現が發揮できるからという理由ですね。僕はあまり意識していませんが、茶碗には日本人の造形意識をアイデンティファイするのにちょうどいいという利点もあると感じます。



「translucent form」 2022年 磁器 径18.0×高さ21.5cm
Courtesy the artist, Yutaka Kikutake Gallery

—海外の焼き物も多くご覧になつていると思いますが、どのように感じます。



にいさと・あきお 1977年千葉県生まれ。早稲田大学第一文学部哲学科中退後、2001年多治見市陶磁器藝術研究所修了。国内のほか、アメリカ、イタリア、ルーマニアなど海外でも多くの展覧会に出演し、高い評価を得る。

Information MTK satellite vol.1 新里明士+鬼頭健吾
(開催中~5/21・MTK satellite)、個展(4/28~5/4・寺田美術)

焼き物は世界中のどこにでもあります。その土地の焼き物はその土地の人々に愛されています。工芸の中でも、共通言語と言える素晴らしい文化だと思います。

たびたびイタリアに滞在して、向こうの人と土を見せ合つたり、白釉の模様を研究したりしていますが、日本とはそもそも焼き方が違います。現地の土の特性上、一回高温で焼いてから釉薬を低温で焼くので、土が焼き締まつていなくても釉薬が焼ければよく、釉薬の白い部分に絵付けをした装飾的な焼き物が特徴的です。海外で制作をするときは、自分が作りたい方向性と現地の表現を適応させのに何年もかかります。今後もこうした試みは続けたいと思っています。来年はイギリスに行くつもりです。

茶碗 アートの交差点

月刊 アートコレクターズ

*The Pleasure To See.
The Pleasure To Buy.*

May
2023 NO.170

5

Art Collectors'

茶 アートの交差点

碗

清水穂美子

岡倉兄弟が説いた「茶」の真髓
茶の湯をうみだした日本の文化

神津朝夫

世捨て人の眼
見立ての美しさはなんにか

清水穂
寄稿

「アートコレクターズ」 No.170 2023年5月号
茶碗 アートの交差点

新里明士 実用性とオブジェ性の緊張関係

2023年4月25日刊行